

ゲール語：
再生，言語，文化，そしてアイデンティティ

Where is Gaelic? Revitalisation, language, culture and identity

ジェームズ・オリバー

金野伸雄 訳

James Oliver

キーワード：社会言語学・言語・文化

本稿は James Oliver (Visiting Researcher at the Institute of Governance, University of Edinburgh) の社会言語学分野における論文 “Where is Gaelic? Revitalisation, language, culture and identity” (*Revitalising Gaelic in Scotland*, ed. Wilson McLeod, Edinburgh: Dunedin Academic Press, 2006 に所収) の訳出を試みたものである。

0. 序論

本論文は将来のスコットランドにおけるゲール語の位置に関する、平凡ではあるが重要な問題、すなわち日常の文化間対話について論じたものである。筆者はゲール語を用いた教育を提供しているグラスゴーとスカイ島の中学校 2 校で調査研究 (2002) を実施し、そこで得られた実証的なデータのいくつかを検証している。筆者が調査対象として設定したのはゲール語話者、ゲール語学習者、そして非ゲール語話者である。現代のスコットランドにおけるゲール語の社会文化的、政治的、空間的、そして言語的な背景は、かりそめにもゲール語が流暢に話せる人だけに限られるわけではないというのがその理由である。こうした流動的背景から、‘Where is Gaelic?’ (ゲール語はどこに存在するのか。) という問いが生まれてくるわけである。

この実証研究は、ゲール語に関する先行研究から生まれたいくつかの疑問に触発されてなされたものである。特に、Sharon Macdonald (1997) および Richard Rogerson and Amanda Gloyer (1995) の両研究が念頭におかれている。この両研究では、次のようなあけすけな疑問に人々の関心が集まった。

ゲール語は一部の人にとって、交流のための言語からよりアイデンティティのシンボルとしての言語になりつつあるのだろうか、そうだとすると、若者の間でどのようなアイデンティティが鮮明になってくるのだろうか。(Macdonald, 1997)

文化的アイデンティティの中心的指標として言語の果たす役割に疑問の余地があるのだろうか。(Rogerson and Gloyer, 1995 cf. Edwards, 1985)

本論文はこれらの疑問に検証すべきあるいは批判すべき仮説として対するのではなく、それをスコットランドにおけるゲール語と若者をとりまく実際的な状況に対応するための、思考の道具として用いる事その目的である。

1. A new Scotland 新しいスコットランド

英国においては 1999 年の権限委譲以降のスコットランドをさして、「新しい」スコットランドと

いう呼び方がされる場合がある。たしかに 2005 年には the Gaelic Language (Scotland) Act (スコットランドゲール語法) が成立するなど、状況には変化がみられる。そしていまやゲール語は法的には確たる地位を得、重要な前進をとげたと言ってもよからう。この法律によってゲール語という言葉に国家レベルで、そしてまたより正式に、高い地位が与えられたというだけでなく、もっと地方の公共政策や統治のレベルで、この言語を有形・無形の差別から守る装置が与えられたという二重の意味で、この法律には意義がある。しかし現在法律として定められているのは、単にゲール語の問題だけにとどまらない。なぜかという、この新法はスコットランドにおける市民社会およびそこに必然的に内包されているダイナミズムの結果であり、また表現でもあるからである。言い換えると、ここでいう市民社会というのは、スコットランドは他の国々とは違っているんだという意識の文化的表現なのである。

この市民社会は、過去数十年にわたりゲール語という言葉をも、より公的に、より広範囲にその教育システムの中に取り込んできた。それと併行して、文化施設の充実や芸術活動を通じてゲール語を支えてきた。このことからこの新ゲール語法のより深い意味が明らかになってこよう。つまり、ゲール語はスコットランド文化の一部になっているのである。もちろんスコットランド人すべての文化の一部というわけではないかもしれない。しかしこのような展開を目の当たりにすると、ゲール語という言葉が空間を超えて特定の地域だけに、あるいは時間を超えて「いにしえの時代」だけに、文化的に適合しているものではないという事が明らかになる。想像力をどのように巡らそうと、ゲール語は明らかにスコットランドという文化的ダイナミズムの中での欠かせない要素であり、だからこそ、その保護を目的とする法律の及ばないところでも適合性を保ち、また意味を持っているのである。筆者は、このような理由があるからこそ、ゲール語がスコットランド文化の一部として主張されていると考えている。だから、なにもゲール語とスコットランドの歴史的あるいは根源的適合性といった、曖昧かつ感覚的な議論に立ち戻る必要はないのである。

けれども現実には、ゲール語はスコットランド文化の一部として様々なイメージで捉えられている。したがってこの論考は、ゲール語新法そのものに関するものではない。ゲール語話者の人口が徐々に減少しつつあるのとは裏腹にゲール語そのものの公的存在および地位が高まりつつある、スコットランドという変化しつつある状況のなかで、筆者は若者に対して行われた定性的な調査をいくつか見直し、彼らのゲール語との関わりを調査した。若者の感覚や態度を理解する事によって、ゲール語復活の努力が不可避的に巻き込まれている社会的ダイナミズムや文化的背景を、明らかにする一助となるとの考えに基づいてのことである。この点で言うと、(法律の中のゲール語という) 公的な地位の重要性、あるいは言語政策の成否をはかる指標としての統計結果を対象にする従来のやり方では、全体像はなかなかつかみきれないと言えよう。

2. Community and society 地域と社会

ゲール語は伝統的な Gaidhealtachd (ハイランド地域の歴史的ゲール語使用域) に限定されているというのはかなり一般的な仮説であるが、この仮説は徐々に崩れつつある。これはゲール語が政治的に扱われる度合い(公共政策の中での新たな地位)や、ゲール語話者のコミュニティがますますいわゆる複雑な社会(非伝統的、社会文化的ネットワークおよび状況)に中心を移しているという逆説と関係がある。このような社会文化的な状況変化を例えるには、社会学の伝統的な対概念である *Gemeinschaft* と *Gesellschaft* という捉え方を援用するのが有益であろう。このドイツ語は英語ではそれぞれおおよそ *community* (地域) と *society* (社会) にあたる。いずれも社会の成員に関する概念である。*Gemeinschaft* の方は自然発生的な参加概念に基づいており、構成員の資

格は自己充足的・自己永続的で長い伝統の中にある。一方 Gesellschaft の概念はこれとは異なり、構成員たる資格はより条件的で手段化しており、自己の利害に基づいている。これは、近代化が加速し社会がますます伝統から隔絶されていた時（つまり産業社会のピーク時）に、伝統的なものと近代的なものとの間に一線を画そうという考えがもとにあったのである。この対概念によって、産業社会の中で変化しつつある社会関係の自然発生的な側面と人為的な側面との間の、明らかな対比と断裂が浮き彫りにされた。

もちろんこの Gemeinschaft と Gesellschaft という二分法はどちらかというところと荒っぽい区分である。とくに、グローバル化と社会の複雑化というポストモダンの概念との関係でいうと、またことに技術進歩を通じて governmentality (Foucault, 1979) (統治性) が全西欧諸国に浸透したと思われる環境下では、そのようなことがいえる。しかしながら、一般的に言ってゲール語や Gaidhealtachd の地域的境界性という概念を再考するに際して、この二分法は相変わらず有効である。この概念は、ゲール語は伝統的な地域 (Gemeinschaft) という環境にのみ属するものであるという、根強いまた時に反発的な考えを反映したものである。これは極端な場合、ゲール語は近代社会とのつながりをほとんど持たない過去のものであるとの解釈にもつながる。それほど極端でなくても、地理的に見るとスコットランド社会の辺境に位置する田舎であるハイランドにこそゲール語はふさわしい、と考える人もいる。けれどももちろん、ゲール語は近代社会の「中」に、そしてスコットランドの町の「中」に存在し、いまでも近代市民社会と関わりを持ち続けている。すなわちゲール語はますます境界性を失いつつあり、社会 (Gesellschaft) というより広範なしかも様々な条件に支配される環境を反映する形で取り込まれ、時代を超えたものに変化しつつある。こうして社会学の類似概念を持ち出すのは、その二分法ゆえの粗雑かつ限定的な特質を十分理解した上で、ゲール語から生まれる想像力の境界性・非境界性という対立を、強調しより強く意識するためである。ともかく、このような観点はスコットランドのゲール語のなかで日々起きているダイナミズム探求の一助にもなるし、ゲール語はどこに存在するのかという問いに対する答えを考える上でのプラスにもなる。

3. Normalising Gaelic ゲール語の一般化

Charles Withers によると、ゲール語は地理的にみるとスコットランドの社会や経済の歴史をより広く反映した、ダイナミックな歴史をもっているという。またゲール語は文化の面においても社会の面においても、私的領域から公的領域へ推移したことも明らかである。これはたとえば現在、その言語存続の中心的役割が、より伝統的な家庭環境から公教育に移っている事その一例である。したがって、筆者が単に物理的空間だけでなく、community と society というより抽象的概念に言及しているのは明らかである。「ゲール語はどこに存在するのか？」との質問に対して、答えとしてふさわしい場所はたくさんある。ハイランドや島嶼部の「中」、スコットランド中の地名の「中」、世論調査の「中」に。それだけでなく、教育システムの「中」、メディアの「中」、行政の「中」、芸術や観光事業の「中」、経済の「中」、そしていまや法令全書の「中」に。しかし、とりわけ重要な場所がある。それはスコットランドの人々のこころや想像力の「中」である。だから、その未来を決定するのは人々のゲール語に対する姿勢だと考えるのは理にかなっている。

新ゲール語法によってゲール語により大きな威信が与えられたことは、全国規模でその正常化プロセスの後押しになる事は間違いない。ただ、言語の一般化は反発も生むというパラドックスも存在する (Macdonald, 1997)。実際、スカイ島やグラスゴーの若者に対して筆者が実施した調査の中に、このパラドックスが浮き彫りになっている。

男性 a そうですね、スコットランド人であるということは、ある意味、文化ともの、つまりスコットランドの文化をもっているということで、スコットランド文化にはゲール語があるんです。

男性 b ええ、でもゲール語をしゃべれないからといって正当なスコットランド人じゃないという事にはならないでしょう。

(スカイ島の流暢なゲール語話者)

だから、スコットランド文化の一部として言語の一般化が進められても、地方あるいは全国レベルで会話言語として自動的な復活が遂げられるわけではない。これは筆者の調査協力者からひろく得られた反応であり、問題点でもある。若者たちは、ゲール語をスコットランド文化の一つの指標として捉えている。ただ、それは排他的なものとしてではない。この点、世論調査の結果を利用して、あるいはゲール語を用いた教育の受講者数を利用してゲール語化状況を数値化することに対するこだわりは、傾向としてこれによく似ている。ゲール語を数値化するのは有益ではあっても限界もある。たとえば、ゲール語を用いた教育をうける若者の数の増加は、疑いもなく前向きな展開であるが、個人が言語を使用しそれが永続化する中で言語と持っている関係、つまりこれら若者の社会や文化の中でゲール語が占める現在の位置、さらに将来の位置、というものは数値だけではつかめない。言い換えると、これは若者の生活の中でゲール語はどこに存在するのか？という問いに等しいといえよう。ゲール語の使用に関する本格的な研究は、まだ着手されていない状況である。しかし私の研究により、若者の生活の中でゲール語が占めている役割が少しずつ明らかになってきた。

4. Language use 言語の使用

ここでは、調査協力者が教室外でいつ、どのくらいゲール語を使っているか、について考えてみる。言語使用のパターンは、スコットランドにおけるゲール語の将来にとって重要であり、そのことは個人のアイデンティティの形成に影響を及ぼす。具体的な言い方をすると、ゲール語は第一言語として選択されるほど、若いゲール語話者のアイデンティティの中に深く根付いているのか、あるいはゲール語は時折、または限定的に使用される第二言語としてのスキルになりつつあるのか？ここで殊に重要な意味を持つのが家庭環境である。

うーん、そうですねー、実際ゲール語にはあまり自信はありません、というのも両親がゲール語をしゃべらないからです。(ゲール語の流暢な女性、スカイ島)

両親もゲール語が上手いので、とても楽です。(ゲール語の流暢な男性、グラスゴー)

このコメントから推測される事は、言語の使用、拡大して言うと言語に対する自信と能力における重要な要素は、そのゲール語話者の両親の言語状況だということである。次の表1に調査協力者の家庭の言語状況が示されている。(いずれも数値が小さいという事は、この調査研究の定性性を示している。)

表 1. インタビューを行ったグループとその両親のゲール語に関する状況

Interview Groups	Number in Group	Incidence of two Gaelic speaking parents	Incidence of one Gaelic speaking parent	Incidence of no Gaelic speaking parents
Glasgow Fluent	6	3	3	0
Glasgow Learners	6	0	0	6
Glasgow No Gaelic	6	0	0	6
Skye Fluent	15	7	4	4
Skye Learners	6	0	3	3
Skye No Gaelic	6	0	2	4
Totals	45	10	12	23

流暢な話し手のうち両親ともゲール語を話すのは2分の1弱という事がわかる。さらに先に引用したスカイ島在住の女性の例からもわかるように、家庭にゲール語が存在しないという事実が、ゲール語の力に対しても、またその自信に対しても影響を及ぼしている。このことは同様に流暢な話し手の中で、ネイティブスピーカーとみられていた話し手のコメントからも明らかである。結局最後には競合する言語の中から英語が選ばれるという結果になることが多い。英語という言語がスコットランド社会において優勢であることからその原動力が生まれているわけである。したがってこのような要因が絡み合う事によって、結局ゲール語が若い夫婦から子どもたちに伝えられていく可能性が少なくなっていく、という結果になりやすいのである。

家庭内で身についたゲール語に対する習慣や態度は、ゲール語の将来にとって決定的に重要な要素となる。たとえばグラスゴーの若いゲール語学習者を例にとってみると、父親か母親のどちらかがゲール語を話す例は皆無である。そして彼らは一例をのぞき全員ゲール語を用いた初等教育を受けてはいるが、ゲール語が流暢にはならなかったのである。このような事実を見ると、主要な学校で英語を使っているという状況の中にあってゲール語を用いた教育を行っている部門からは、永続的なゲール語力の獲得を保障する十分に豊かな言語環境は生まれにくい、という事が分かってくる。グラスゴーのゲール語のみによる初等学校の開設には、おそらくこの問題が中心に関わっている。そしてそれはその後すぐに、就学前教育から6年制の中等学校までを含むゲール語のみによるキャンパスの設置へとつながった。ゲール語のみによるキャンパスが必要な事は疑いはないが、家庭環境の重要性がなくなるわけではない。むしろゲール語がより深く教育環境に浸透するのに反比例して家庭環境からより遠く引き離されてしまう事になり、言語と家庭との断絶がより深刻になってしまう可能性があるからである。

表2をみれば、家庭におけるゲール語の重要さが浮き彫りになる。これによると、両親ともゲール語を話すどの家庭でも子どもはゲール語が堪能である。ゲール語を話す両親のいない家庭では、ゲール語に堪能な子どもの数は減少する。

表 2. 両親がゲール語話者であるかどうか、およびインタビューを受けた人のそれに関連した言語状況

Parental Gaelic language status	Number of Incidences	Fluent speaker	Learner	No Gaelic
Two parents speak Gaelic	10	10	0	0
One parent speaks Gaelic	12	7	3	2
No parents speaking Gaelic	23	4	9	10
Totals	45	21	12	12

この調査結果から、家庭の役割が言語の保持にとってきわめて重要だという事が分かる。ゲール語のようなマイナーな言語の場合、両親との生活の中でその言語との関わりが全くなければ、子どもがゲール語に堪能になる可能性はおそらくきわめて限られる。このことは、ゲール語を全く話さない両親は、子どもをゲール語を用いた教育を行っている学校にいれない方がいいという意味ではないが、親自身がゲール語を学習する、あるいは子どもを日常的にゲール語の使用されるより広い大人社会に関わらせるといった努力をすべきである。そのようにすれば子どもたちの中に、ゲール語という言語を教室や学校の外の環境と関連づけて考える態度が生まれるだろう。ゲール語話者のコミュニティがすぐそばになれば、このような関わりを持続する事は困難であろう。しかしながらゲール語話者のコミュニティというものは、学校の中のゲール語話者とは区別すべきである。ゲール語が堪能にならないという生徒の問題は、何事もゲール語で進められる学校があれば緩和されるかもしれない。しかし、だからといってその子どもたちが教室から離れた場合、言語の選択や使用、そして英語を話すという広く浸透した習慣に対して大きな影響があるとは考えにくい。若いゲール語話者の数が増加しても、それが直接ゲール語から英語への言語推移を逆転させる事にはならないというのが、ゲール語の再生を評価する際のジレンマである。そうではなくて、言語推移の鍵を握るのは、自信に満ちたゲール語話者としてのアイデンティティの獲得である。

ゲール語を用いた教育とそのゲール語への関わり方との関連という問題は、人格形成を促すアイデンティティにとって中心的な問題である。しかしながら、この関係がいかに曖昧かということが、次にあげたグラスゴーのゲール語学習者の発言によってさらに明らかになってくる。

あなたはどのようにゲール語を勉強しているんですか。

—ゲール語が好きなんです、だから勉強しているんです。そんなに嫌いじゃないんです、ただ... 数学をやるよりはいいんじゃないかとかって言う感じなんです...

だから時々やっているんです... それに... 無料バスもあるし。(女性学習者)

—うーん、理由は... (笑)... なんか、この学校に入ると無料バスのサービスがあるし...

まあ... 地元の学校には行きたくなかったし、無料バスがないと遠すぎるとか... それにいまの学校の方があちらの学校よりいいんです。(同上)

この発言から、ゲール語を用いた教育へ移ろうとする時に、ゲール語と無関係な要素が重要であるという事実が明らかになる。つまりそのときの理由付けには言語そのものに対する忠誠心とは逆に、条件的、教育的な動機が反映しているのである。そしてこれは、自分の属する文化に対する *Gesellschaft* 的な姿勢を連想させる。すなわちゲール語が日々の社会習慣として完全に一体化されるのを逆説的かつ同時に妨げることにつながるのではないかと思わせる。私が別のところで論じているように、ゲール語には常に伝統的な共同体のイメージがつきまといっているため、*Gesellschaft* の精神が高まっても、伝統的共同体の中のゲール語から非伝統的環境の中におけるゲール語へという発展の道が妨げられているのである。

ゲール語教育を選択する際に関わっている可能性のある条件的、教育的な動機として、もう一つ別の事実が反映されている。すなわちゲール語教育が、バイリンガル教育そしてより高い学力養成への一つの道として積極的に推奨されていることである。Richard Johnstone (1999) の最近の研究によると、ゲール語を用いた教育は子どもたちの学力の妨げになってはならず、むしろゲール語を用いた教育を受けた子どもの方が、英語による教育を受けた子どもより学力が勝っているケー

スもあることが明らかになっている。子どもがよい教育をうけるとか、可能な限りよい学校に入りたいというのは親として当然の関心事であり、ゲール語教育を受けようとする場合に通学バス代が無料というのは、生徒がグラスゴーのどこに住んでいようと、追加的な動機付けである。だから、ゲール語との係わりは潜在的に従属的な要素にすぎない。子どもにゲール語を用いた教育を受けさせようという家族、とくに家庭内でほとんどゲール語が聞かれない家族では、やや迷いが見られる場合がある。家庭内でゲール語との接触が全くないという潜在的な問題を複雑化させている要素として、ゲール語と教室との結びつきがますます強くなる一方、一般的に教室外での仲間とのつきあいは英語で行われているという事実がある。次にあげるスカイ島でのインタビューからの抜粋に、この力学が鮮明に映し出されている。

男性 c ええ、だけど英語を話すようにしているんだ。

男性 d それはただ...

男性 c その気があればゲール語を話せるんだ。

女性 そのつもりになれば、みんなゲール語をしゃべれるわ。

男性 c **Bruidhinn Gaidhlig an-drasta...** [ゲール語を話そう] **Chan eil thusa ag iarraidh idir - ag iarraidh bruidhinn Beurla...** [ちっとも話したくなんかないー英語をしゃべりたいのか...] いいかい、君は英語をしゃべりたいんだろ。

男性 d 英語の方が上手くしゃべれるからね。

男性 c ということは、ハイランダーとしてのアイデンティティを保つ事ができるのに、ほかの英国民と同じになる事を選択しているんだね。

英語の選択に関するこの回想的議論は、言語能力とアイデンティティとの潜在的に曖昧な関係に対する意識を明らかにしていて興味深い。これはあるインフォーマントが別のインフォーマントに比べて、ゲール語話者としてのアイデンティティが強いという事を言っているのではなくて、基本的な言語能力がアイデンティティの表現に混乱を引き起こし、一層偶然性を強める結果となっている。最後の言葉から分かるように、ゲール語はインフォーマントの地域における体験と理解、つまりスコットランドそれ自体とは別のハイランドという環境と強く結びついている。少なくともこの応答者にとって、ゲール語をしゃべる事はハイランダーとしてのアイデンティティを保つ事になるのである。この事はゲール語の地域や環境とのつながりを強調したことになるが、ゲール語がしばしば英語に対し従属的立場に置かれている限り、それも曖昧である。これはとくに家庭内にゲール語を話す親がいる若者たちが、学校の外で決してゲール語を話そうとはしないという意味ではない。しかしながら、同じ人たちに将来日常生活において、ゲール語の使用が増えると思うか減ると思うか訊ねたところ、次のような答えが返ってきた。

男性 e 永遠のせめぎ合いだね。こんな状況がいつまでも続くんだらう。

男性 f (ゲール語は) おそらく消滅するでしょうね。町に出て行く人が多いから。(スカイ島の流暢なゲール語話者)

ここではゲール語と地域とのつながりは明白である。地域のコミュニティにおけるゲール語話者の集中度が下がるということが、ゲール語にとって痛手となることを意味する。ゲール語圏経済の発展にもかかわらず、ゲール語圏のような農村地帯ではふつう、「いい仕事を探す」ことはそこを離

れる事を意味するわけで、人口の流出は当たり前の事である。それにしても、上記の発言が若い堪能なゲール語話者のものであるという事を考えると、これは彼らの将来の生活におけるゲール語の地位に関してきわめて否定的な発言である。ゲール語の社会的使用環境に関する認識の面において、多様性が欠けているということが重要である。文化への所属は自然で自己充足的なものであり、しかも社会的な行為と直接の関係性をもっているのだという経験の表現はみられる。しかしながら、結局それを実現できるのは伝統的な環境でしかないという理念に支配されてしまうのである。このようにゲール語に境界を設ける考え方は、とくに近代の複雑な帰属社会との関係からいうと、伝統的な環境というものを超える存在としての適合性をもつゲール語に対して、いたずらに制約を加えることになる。

グラスゴーとスカイ島におけるゲール語の適合性は明らかに異なっており、そのことが究極的にはより広い社会におけるゲール語の地位に影響を与えるのである。しかしこれもゲール語という言葉の境界概念、あるいは固定観念に基づいているのである。社会の日々のネットワークにおける英語の支配力が、この力学をややこしくしているが、これは現代のスコットランドにおけるいわゆる伝統的文脈においても同様にあてはまる。純粹に社会言語学的立場から言うと、そのことが問題の要諦である。つまり、若い人たちがゲール語話者としてのアイデンティティを確立する事ができるよう、いかにして最良の環境と機会を作りまた提供するかである。ゲール語話者として最強のアイデンティティは家庭で形成されるが、しかし地域的、あるいはコミュニティ的な意味での適合性があれば、家庭や家族を超えた環境下におけるゲール語使用も促進されることになるのである。

私の調査では、ゲール語を用いた教育を受けた若い堪能なゲール語話者は、教室外の自分たちの世界ではゲール語はあまり使われないと語っている。また、堪能なゲール語話者の多くは、いわゆる母国語環境出身ではないことも明らかになった。これは特定の家庭に於けるゲール語の地位の反映であるだけでなく、ゲール語を用いた教育部門の成功と急成長の反映でもある。しかし一般的には、流暢な話者の大方にとってゲール語は辺境に位置する第2言語にすぎない。このようなわけでこれまでのゲール語を用いた教育は、日常的な言語使用を創出すべき別の構造や状況が得られないときの一時しのぎになっているのである。1994年にJohnstoneは、ゲール語支援策の展開に関する報告のなかで、この点にハイライトをあて次のように述べている。

わたしとしては長期的にみてゲール語の将来は、スコットランドの意味ある少数の人たちが、それを第1言語として選択して使用する事にかかっていると考えている。そうすることによって彼らの英語話者としてのアイデンティティや暮らしぶりに最低限マッチする、ゲール語話者としてのアイデンティティや生活様式を維持し、発見することが可能になるのである。

ゲール語を用いた教育は着実に生徒を集めているという点では成功したと言ってよい。そしてこれは、ゲール語をしゃべれる人の数を補充しつつある。しかし、このような若者の存在がはたして違った状況を生み出すのだろうか。彼らの生活の中のどこにゲール語が存在しているのだろうか。彼らは後の人生で、ゲール語を使用するという選択をするだろうか。地域社会の日常言語として選択されるゲール語の保持を確実なものにするために、十分な手当が尽くされているのか、あるいは十分な手当を尽くす事ができるのか。ゲール語が安定した未来を持つためには、ゲール語話者たちが社会の中で日々ゲール語を使用する機会が必要である。著名な言語学者のKen Hale氏が次のように論じている。

言語推移の方向を逆転するためには、結局のところある条件が必要である。すなわち、自分たちの家族あるいはそれに対応した社会の単位で使われている地域の言語を、学習するか伝達するかを選択権がなくてはならない。

「選択」がキーワードであるが、その選択をするにあたって「ある条件」がそれに深く関わっているに違いない。ここで媒介という作用に気づく。すなわち、社会構造が我々を支え想像された生活が実現できるようになっていなければならない。言語使用の長期的枠組み構築の必要性に関して、Johnstone (1994) はまたさらに次のようにはっきりと述べている。

理想的に言うと、(言語の) 世代間伝達を持続させるには切れ目のない経験のライフサイクルが必要であろう。幼少期の家庭に於ける第1言語としてのゲール語は、学齢前および初等学校におけるゲール語、中等学校に於けるゲール語、継続教育、高等教育そして職場に於けるゲール語、そしてそれから自分の幼い子どものための家庭に於けるゲール語へとつながっていく。

事実上、これはゲール語を話す地域社会の復活を含意している。当面、世論調査にあらわれた退行現象を逆転させる事に、主として力点がおかれているように思える。これは、言語能力を高める事を意味するものであり、必ずしも実際の使用を意味するわけではない。2001年に報告されたゲール語話者の約45%は、伝統的なゲール語使用域(Gaidhealtachd)外で生活していたという事実は、大部分のゲール語話者が日々の主たるコミュニケーションの手段として、ゲール語を使っているわけではないという事を示唆している。政策の焦点はスコットランド全域に於けるゲール語を用いた教育の継続的發展にあてられているが、これは必ずしも世代間の伝達や日常的使用を促進するわけではない事も理解しなければならない。

5. New Directions? 新しい方向?

問題は、根本的な社会変革および近代化の影響により、ゲール語が意味を持ち、かつゲール語が有用な環境が変化して、つながりがだんだん希薄になってきたことである。想像力やアイデンティティに関係するこの変化に、人々は混乱している。(消滅しかけている)文化を想像力で復活させようという動きには抵抗もある。伝統的なゲール語地域で言語推移が起きたのは事実であり、近代化の波は簡単には押し戻す事はできない。言語を再生させる試みとして、現在ゲール語は教育システムと深い関わりをもっている。ただ、私や他の研究結果からも明らかな通り、ゲール語を用いた教育システムを受けた若者が教室外でゲール語を使用する率は、きわめて低いというのが現状である。しかしながら短期的視点でみると、ゲール語の使用が広がったという事は、ゲール語の長い将来を確保するという目的のために必ずしも危機的な事とは言えない。ゲール語が日常的に使用されるという事は、その保持の観点からすると望ましい事は明らかである。ただし、それが主としてある状況のための技術的手段として学習されるということになると、現在および将来の世代のアイデンティティの中での言語の役割は、多くの場合、文化との結びつきの強い伝統的な記憶とは異質なものになるであろう。しかしすくなくとも、ゲール語は依然としてそこに存続しており、新たな方向性を示す潜在的な力を秘めている。ゲール語を用いた教育という試みは、したがって限界はあるがゲール語の保持にプラスに働いている。このことは若者のアイデンティティに対してこれまで以上に対応すること、そして日々の社会状況の中で言語の再生を促進すること、に向けた出発点と考えたい。結局のところ、有機的で、自己持続的なゲール語社会の復活は、人々の行動を容易にし、人々

がゲール語話者としてのアイデンティティを実践し、地域の創造に協力することを可能ならしめるような（権能付与）政策にかかっている。

私の研究から、若者は概して、言語的背景や言語能力にかかわらず、原則としてゲール語を用いた教育に対しては肯定的である。しかし、もともと何らかの認知された能力をもったゲール語話者ではなかった若者の大多数は、将来のゲール語の使用や学習に対して強い希望はまったく示していない。それが現代のスコットランドにおける生活と、特に強い係わりがあるとは考えていないからである。とくにグラスゴーにその傾向が強い。一方、スカイ島の若者の中ではゲール語という言語が場所とか継続性といった点で比喩的な意味合いを持っている、また地域の中で特別有用な領域を持っている、と感じている事からも分かるように、ゲール語に対する意識が強い。彼らは継続性、アイデンティティ、場所に関してより地域とのつながりの強い捉え方をする傾向がある。一方、グラスゴーの学生は言語と場所の間にはギャップがあって、ゲール語に関しては連続性をほとんど感じておらず、キャリアアップや経験を豊富にするための手段として捉える傾向が強い。つぎにあげるグラスゴーとスカイ島のゲール語話者からの引用例に、ゲール語地域の範囲のさらなる展開が示されている。現在起きつつある社会変化、そしてまたゲール語が異質な環境に展開しつつあることを強調したコメントになっており、それをより広い多様な世界の象徴であるにとらえる人もおり、もっと地域とのつながりの強いアイデンティティの象徴であると捉える人もいる。

今では Email とか利用すれば、カナダ、アメリカの人とゲール語で話ができるんだ。で、カナダとかに親戚がいても、みんなゲール語をしゃべるんだ。そう、いいことなんだ。（グラスゴーの流暢な男性ゲール語話者）

僕は教育が鍵とは思っていない、だって、それって本当は、家庭内で教えたり、いつも家庭内でしゃべったり、家庭に地域のいろんな人を呼んでゲール語をしゃべるってことだから... それにスコットランドの小作農生活は消えかかっているし、だからみんなが家庭にとどまるっていうチャンスはもうあまりないのさ。（スカイ島の流暢な男性ゲール語話者）

この発言は人と人との交流が変化している有様や、地域の概念がどのように変化しつつあるかを教えてくれる。しかし同時に、近代化が伝統に取って代わるにつれゲール語によるコミュニケーションがどのように変わりつつあるか、についても教えられる。David Crystal も述べているように、絶滅危惧種の言語も、もちろん他の要素にもよるが、話し手が電子技術を利用することができれば進歩する。これは今のゲール語が置かれた状況の重要な側面である。ゲール語は現実ではあるが共同体を伴った、今日の社会の一部である事は明らかである。Miller と Slater によると、インターネットによっていわゆる「拡大的現実」とよばれる新しい段階の社会関係が生まれている。インターネットによって人は、自分の思っている通りの自分になる事ができる。つまり、自分の拡大的可能性を探る事ができるのである。これは（学校を除き）他のゲール語話者と日常的な面と向かった接触のない個人にとってはいいことである。そうすることによって、自分がその共同体に組み込まれたという感覚にさせられるからである。しかし本来的には、それだけでは危機に瀕した言語が必要としている、社会的につながりの密な共同体の設立を手助けしたり強化したりするには十分ではない。

言語は存続のために共同体が必要である。だから、危機に瀕した言語を救う事ができるのは、共同体だけである。これはきわめて本質的な問題である。（Crystal, 2000, p. 154）

共同体、そして共同体のみが生きている言語を守る事ができる。もし共同体がその責任を他者に譲りわたすならば、あるいは（学校の教師のような）共同体内部の限られた人に譲り渡すならば、言語は死滅してしまう。言語を守る努力は共同体全体を巻きこむべきであり、その一部だけであってはならない。(Valiquette, 1998, p. 107)

Community という言葉が正確には何を意味するか、これも問題が多い。ある面で言うと、この見るからに本質的な要素もそれが引き起す閉鎖的概念にしばられている。しかしながら、言語が共同体のなかに強固な基盤をもたなければ、言語法のような他の展開は空虚なものとなり、単なる包含あるいは威信の象徴にすぎないものとなる。これは、言語推移を逆転させる仕事は社会的かつ文化的責任であり、社会的・文化的行為のパターンに依存することを意味する。ゲール語は日々習慣的に使用される環境を必要とする。そしてこれは小作制の共同体であれ、都市部のゲール語ネットワークであれ、インターネット上であれ、等しく存在する。ゲール語が伝統的環境また近代の社会・文化状況に等しく依存していると考えするには、想像力の持つ制約を取り払う必要がある。このような環境を安定化させ促進することに焦点をあて、努力が払われなければならない。というのも、文化のレベルでみると、ゲール語はスコットランド人であることの必須要件とは考えられていない。しかしこれは、ゲール語がハイランドと島によって囲まれた環境に存在するという排他的概念を、正当化するものではない。この考え方によれば、ゲール語地域の約 45% が排除される事になるからである。公共政策のレトリックを用いると、言語政策は協調のゆき届いたサービスとひと中心の共同体を創出する必要がある。だからすべてゲール語話者は全員、ゲール語を再生させ正常化する運動の一翼を担わなくてはならない。そのことは異なる地域における異なるものを意味する。つまり本質的にダイナミックなものである文化と社会慣習を想像し直してみることが、ゲール語という言語の世代間伝達の可能性を高めるために欠かせない事である。

私の研究から、ゲール語話者としてのアイデンティティは多くの若いゲール語話者の間で特に強い訳でもないし、広がっている訳でもないことが明らかになった。彼らの主観的・社会的環境によるが、Gaelic という言葉は様々な意味で彼らのアイデンティティを知らせてくれる。スカイ島ではゲール語とかゲール語話者としてのアイデンティティに対して、民族感情に似た態度が示されるということが明らかになっているが、重視されるべきは共通の伝統、文化、場所であり、血ではない。グラスゴーはそれとは全く対照的な環境にあり、ゲール語話者としてのアイデンティティは言語そのものに重点が置かれることがはっきりしており、ゲール語は経済的・職業的な機会獲得への鍵となっている。これは環境対環境の境界がはっきりしているということではなく、教室を超えて拡大するゲール語世界の中の緊張状態、古いものと新しいもの、Gemeinschaft と Gesellschaft、またそれが意味するものの中における緊張状態である。ゲール語は当然のことながらあらゆる場所に存在しているが、今のところは少々居心地が悪そうである。これはおそらく文化の変化における基本的プロセスであり、潜在的に前向きな兆候である。結局、文化というものは静止した状態では存続しえない。近代化と一般化のプロセスでは新しい思考、文化の再配置、想像力の再構築が求められる。最近のエッセイに緊張状態を取りもとうとする試みをみることができる。指導者の New Gael (新しいゲール人) がこう語っている。「ゲール族は死んだ；ゲール語の長寿を！」(Morgan, 2000) この言葉はゲール語の古びた概念とそれから連想されるアイデンティティや文化に対する挑戦と考えられる。近代の複雑な社会におけるゲール語共同体再生に対し、文化的成員関係のより条件的な (Gesellschaft 的) 解釈を当てはめているのである。

6. 結語

では、ゲール語はどこに存在するのか。この問いに対してかっちりした答えを与えるのが、この論考の目的ではない。むしろその広さと奥深さを強調することが目的である。言い換えると、伝統的環境・近代環境のいずれにおいても議論ができて、ゲール語の将来に意味づけをする事ができるということが重要である。これは無意味な問いではない。なぜなら対話の道具として、ゲール語の再生や少数派文化の促進について、より開かれた議論を沸き起こす事ができるからである。

新スコットランドゲール語法を考慮にいれ一つ注意しなくてはならないことは、言語の適切性というものがある存在価値だけに卑小化されてしまう危険性があることである。つまり、それが純粹にシンボリックなものになって、コミュニケーションの道具としての有用性に基かない価値しか持たなくなってしまうことである。Sproull (1996)によると、取引言語という視点だけでは意味のある定義をしにくい「ゲール語経済」というものが成長しつつある。したがって、ゲール語がそこ、すなわち「経済」に存在するという事実は、おそらく言語使用の増加を必然なものとしたり、またそれをいきなり引き起したりする事もなく、ゲール語の存在する場や地位を高めるのに十分であろう。ゲール語法が、スコットランド全域にわたってゲール語の威信をさらに改善する一方で、ゲール語がよりありふれた、当たり前ものになってしまう可能性がある。だから、ゲール語が法制化によりスコットランド内で象徴的な意味で一般化したとしても、そのことはスコットランドの人々が自分たちをゲール人だと感じたり、あるいはゲール語話者（使用者）になることを意味してはいない。これは文化的あるいは言語的アイデンティティの対話にとって特に意味のある事である。なぜなら、そこで結果として発生する社会行動はなんであれ、ゲール語にまわりついていると考えられている境界性に根ざしているからである。このようなダイナミズムは、一部伝統的な小作農制と結びついた *Gemeinschaft* 的発想や、他方、近代社会の学校の教室における手段を中心とする *Gesellschaft* 的発想に、これを見る事ができる。実際にはこれよりはるかに複雑である。アイデンティティというものは社会現象であり、したがって、ダイナミックで偶発的で潜在的な力に満ちている。伝統的なものであれ近代的なものであれ、ゲール語を閉じられた文化環境の象徴として捉えてしまうと、その文化的バイタリティやダイナミズムは失われてしまう。ゲール語はどこに存在するのかという問いが問いかけているのは、この境界性という前提概念なのである。

References

- Billig, Michael (1995) *Banal Nationalism*, London: Sage.
- Chalmers, Douglas and Danson, Mike (2004) 'Sustainable Development: Building Social Capital in Gaelic Language Communities'. Paper presented at the Scottish Economists Conference, Perth.
- Crystal, David (2000) *Language Death*, Cambridge University Press.
- Curtice, John, et al. (eds) (2002) *New Scotland, New Society?* Edinburgh: Polygon.
- Edwards, John (1985) *Language, Society and Identity*, Oxford: Blackwell.
- Foucault, Michel (1979) *The History of Sexuality, Vol.1: An Introduction*, London: Allen Lane.
- Gunther, Wilf (1990) 'Language Conservancy or: Can the Anciently Established British Minority Languages Survive?', in Gorter *et al.* (eds) (1990), pp. 53-67.
- Hale, Ken (1998) 'On Endangered Languages and the Importance of Linguistic Diversity', in Grenoble, Lenore A., and Whaley, Lindsay J. (eds) (1998)

- Endangered Languages: Language Loss and Community Response*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 192-216.
- Hassan, Gerry, and Warhurst, Chris (eds) (2002) *Anatomy of the New Scotland, Power, Influence and Change*, Edinburgh: Mainstream.
- Jamieson, Lynn (2000) 'Migration, Place and Class: Youth in a Rural Area', *Sociological Review*, No. 48, pp. 203-23.
- Jenkins, Richard (1996) *Social Identity*, London: Routledge.
- Johnstone, Richard (1994) *The Impact of Current Developments to Support the Gaelic Language*, Stirling: Scottish CILT.
- Johnstone, Richard, Harlen, Wynne, NicNeill, Morag, Stradling, Bob, and Thorpe, Graham (1999) *The Attainments of Pupils Receiving Gaelic-medium Primary Education in Scotland*, Stirling: Scottish CILT.
- Macdonald, Sharon (1997) *Reimagining Culture: Histories, Identities and the Gaelic Renaissance*, Oxford: Berg.
- MacNeil, Morag M., and Stradling, Bob (2000) *Emergent Identities and Bilingual Education: The Teenage Years*, Sleat, Isle of Skye: Leirsinn Research Centre.
- McCrone, David (2001) *Understanding Scotland: The Sociology of a Nation*, London: Routledge.
- McCrone David (2005) 'Cultural Capital in an Understated Nation: The Case of Scotland', *British Journal of Sociology*, Vol. 56, No. 1, pp. 65-82.
- McLeod, Wilson (2002) 'Language Planning as Regional Development? The Growth of the Gaelic Economy', *Scottish Affairs*, Vol. 32, pp. 51-72. Available at URL: www.arts.ed.ac.uk/celtic/papers/gaeliceconomy.html (accessed 15 July 2005).
- McPake, Joanna (2002) *Mapping the Languages of Edinburgh*, unpublished report, SCOTLANG Project, University of Stirling.
- Miller, Daniel, and Slater, Don (2000) *The Internet: An Ethnographic Approach*, Oxford: Berg.
- Morgan, Peadar (2000) 'The Gael is Dead; Long Live the Gaelic: The Changing Relationship Between Native and Learner Gaelic Users', in McCoy with Scott (eds) (2000), pp. 126-32.
- Muller, Martina (2003) *Sprachkontakt und Sprachwandel auf der Insel Skye (Scotland)*, Studies in EuroLinguistics 3, Berlin: Logos.
- Oliver, James (2002) 'Young People and Gaelic in Scotland Identity Dynamics in a European Region', unpublished PhD thesis, University of Sheffield. Available from URL : www.sheffield.ac.uk/escus/papers.html#//Theses (accessed 15 July 2005).
- Paterson, Lindsay, Brown, Alice, and Curtice, John (2001) *New Scotland, New Politics? Edinburgh* : Polygon.
- Rogerson, Richard J., and Gloyer, Amanda (1995) 'Gaelic Cultural Revival or Language Decline?', *Scottish Geographical Magazine*, No. 111, pp. 46-53.
- Sproull, Alan (1996), 'Regional Economic Development and Minority Language Use: The Case of Gaelic Scotland', *International Journal of the Sociology of Language*,

No. 121, pp. 93-117.

Stockdale, Aileen, MacGregor, Bryan and Munro, Gillian (2003) *Migration, Gaelic-medium Education and Language Use*, Sleat: Sabhal Mor Ostaig, Ionad Naiseanta na h-Imrich. Available from URL : www.ini.smo.uhi.ac.uk/projects/migrationalGME.htm. (accessed 15 July 2005).

Valiquette, Hilaire (1998) 'Community, Professionals and Language Preservation', in Ostler, Nicholas (ed.) (1998), *Endangered Languages: What Role for the Specialist?* (Proceedings of the Second EFL Conference, University of Edinburgh, September 1998), Bath: Foundation for Endangered Languages, pp: 107-12.

Withers, Charles W.J. (1984) *Gaelic Scotland, 1698-1981: The Geographical History of a Language*, Edinburgh: John Donald.